

本大好きっ子をいっぱいに 『子ども司書制度』の 挑戦

「子ども司書制度」が全国的に広まってきています。この制度が描く将来のビジョンはどのようなものなのか、どんな課題があるのか紹介しつつ、発祥の地である福島県矢祭町からルポルタージュします。

執筆 東海学院大学教授 アンドリュー・デュアー

はじめに

2010年のある日、新聞をめくっていると「子ども司書の授与式」という記事が目がとまりました。「これだ！」と思わず叫びました。

司書を養成する大学教員として、図書館利用の促進は永遠の課題です。若いうちに図書館に親しまないと、大人になってから利用する習慣がなかなか芽生えないのです。自ら図書館を使わない保護者は、子どもを連れて行かないし、学校から課せられた読書を楽しもう子どもも少ないでしょう。

記事を見てひらめいたのは、子ども同士で読書を流行させることでした。友達に勧められるなら、本を喜んで読む可能性が高いにちがありません。しかも、司書の仕事を少し覚え、お手伝いができるなら、図書館を進んで利用する子どもにもなるでしょう。つまり、子どもの心理を生かして、図書館と読書の伝道師になってもらえれば、読書習慣は子どもの間でおのずから広がるのではないか、と思ったのです。

その新聞記事には、福島県の矢祭町という自治体が、図書館と読書に親しむ内容の講座を数か月かけて開催し、受講した子どもは「子ども司書」として自分の学校で友達に本の魅力を伝える、とも書いてありました。この「子

ども司書」養成講座こそ、読書ブームの引き金になりうる、と思いました。

「子ども司書制度」とは？

2010年の最初の講座以来、「子ども司書制度」は広がりつつあります。全国各地で養成講座が開かれるようになりました。この制度は講座のほかに、活動の場である学校と図書館の連携、そして活動そのもの、という3部構成です。どれも欠かせないものです。

講座の目的を大きく分けると、3つになります。まずは、受講生が図書館の仕事に触れて司書のノウハウを習得し、図書館の仕組みを理解することです。次に、読書のすばらしさを友達や家族に伝えるために、本を紹介する方法を学ぶことです。3つ目は、本と人を結びリーダーを養成すること、すなわち地域に貢献できる人を育てることです。

これだけの目的を達成するためには、かなり時間をかけて教育しないといけません。しかし講座では、図書館業務を幅広く体験し、読み聞かせ会のための本選びと演出を行い、ときには自分だけの絵本を作ったりすることもありますので、楽しく充実しています。

子どもは「子ども司書」の資格獲得に努力したぶん、本を大切にしてくれます。自分の学校では図書委員として、地元の図書館ではボラン

「子ども司書制度」の挑戦

ティアとして、老人ホームなどでは語り部として、培った技術を發揮します。

「子ども司書制度」への期待と経過

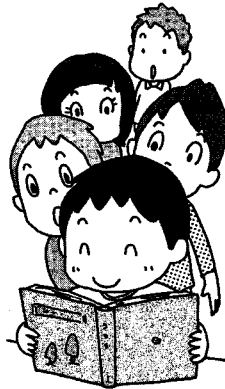
「子ども司書制度」は、まだ十分に世に知られていません。話すとき、必ず説明しなければなりません。しかし、たいいていの人は「いいね」と賛同してくれます。

もちろん課題もあります。まずは、読書が好きなお子どもを育てるには、本と巡り合う機会をつくらなければなりません。本は少しずつ電子ゲーム機器に押されて、子どもの生活環境から消えつつあります。いまの五年生は、インターネットとゲーム機器のない世界を知りません。携帯電話や情報機器は現代の生活に欠かせないものになりました。本は情報源だけでなく、エンターテインメントとしても競争に負けています。

一方で、本が好きな子どもは潜在的に存在しています。その子どもは孤立しているかもしれませんが、「子ども司書制度」は輝くことができる場を提供してくれます。

子どもの心理がカギです。読書という行為は一人で、見えないところで行うことが多いのです。しかし、見えるところで本を読めば、周囲の子どもたちは気になります。楽しそうに読んでいけば、なおさら。恥ずかしく思っていた読書が格好よくなります。

読書習慣を身につけた子ども同士の交流を駆使することによって、読書の楽しさと図書館利用の有用性への理解を自然に広めることが期待できます。読書の感動と知る喜びに目覚めた子どもが、友達や下級生に自分の気持ちを伝えることにより、好奇心が刺激され、協調願望が働き出し、本を読んでみようとする気持ちが自然に広がります。親に「読みなさい」と言われるよりも、友達に「読んで面白かったよ」と言われた方が、読みたくなります。先生よりも友達が勧めた本が魅力的なはずですよ。



ゲームとテレビの話題が子ども同士の口コミによって広がるのと同じメカニズムで、本の話題で読書する意欲が広がる可能性が十分にあります。さらに家庭の協力によってゲームとテレビに触れる機会が少なくなれば、読書が流行する環境が十分に整備されます。これが、「子ども司書制度」の考えの基礎です。

講座の立ち上げも課題です。一連の養成講座は平均して20時間ほどになります。開催する側

の時間的、人的負担は大きいです。行政側と学校側の協力も必要になります。また20時間は、子どもにとってかなりハードではないかという声もあります。しかし、安易に取れる資格よりも、努力して学んだ方が深い理解と達成感につながります。しかも、本と図書館の伝道師となる受講生の活躍を考えると、努力したぶん以上の報いが期待できます。「子ども司書」の育成は図書館の使命に合致します。学校で「子ども司書」を駆使して図書委員の取り組みを活性化したり、読書を流行させたりすることも教育目標の達成につながるはずですよ。

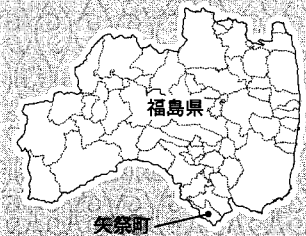
福島県矢祭町が2009年に「子ども司書制度」を考案し、全国初の講座を開いてから五年。いまや全国で30近くの図書館と自治体に、この制度は広がっています。多様な講座の質を保障するために、制度化の促進が新たな課題として浮上しています。有志による「子ども司書推進全国協議会」の設立や、毎年開催される家読サミットにおいて「子ども司書推進全国研究大会」の同時開催、「子ども司書マニュアル策定委員会」の発足などによって、制度の健全な拡張を促すことに努めています。

子どもたちが図書館と読書の伝道師になってくれる、「子ども司書制度」を活用したいのです。得るものを考えれば、制度に乗り生かす価値が大いにあると思います。

「子ども司書制度」のふるさと

福島県矢祭町から

お話をうかがった人 子ども司書推進全国協議会理事長 高橋由美子さん



書店もない！図書館もない！

福島県の郡山から、水戸にぬける水郡線というローカル線で一時間半。茨城県との県境に矢祭町があります。人口6300人あまりの山沿いの町で、列車の本数が一日往復8本ほどしかないのです。自家用車がないと生活しづらいかもしれません。そんなのどかな町で、「子ども司書制度」は生まれました。

この町にはずっと、図書館はおろか、書店もありませんでした。子どもたちの教育を考へる者にとっては、切実な問題です。本との関わり合いが薄くなるのではないかとという心配は、長く長く心の中にくすぶっていたのです。

そんななか、古い武道館を改築して図書館をつくるのがようやく決定しました。しかし図書購入費は、なんとたったの300万円?! 子どもたちに十分な本を揃えることができないと危惧した私が、福島市で開かれたある会

議で、寄贈による図書館づくりの夢を吐露したところ、毎日新聞社の福島支局長が賛同。紙面で紹介してくださり、寄贈本が集まるようになったのです。その結晶として、「子ども司書制度」の母ともいえる「矢祭もつたない図書館」が完成しました。現在、全国のみなさんから寄贈していただいた本は45万冊にのびります。最近では子ども対象の本もたくさんいただけるようになり、嬉しいかぎりです。

ただ、蔵書に恵まれていても、単なる本の貸し出し機関に終わってしまつては、本来の目的である「本を通しての子どもたちの教育」にはつながりません。その焦りが「子ども司書制度」の発想へとつながっていったのです。

そんなとき「朝の読書運動」を立ち上げた、佐川二亮氏から救いの電話をいただきました。佐川氏も矢祭町の出身だったのです。「文部科

学省の企画競争公募に「子ども読書の街づくり事業」がある。子どもが中心になる企画をつくって応募してみたら……」という主旨でした。右往左往しながらも、締め切り数日前になんとかまとめた企画のひとつが、この「子ども司書制度」だったのです。

「図書館には司書が必要だし、子どもが参加してもいいじゃないか」「夏休みの推奨図書を、子どもたちが選んでもいいじゃないか」という発想が原点でした。そんな性急な思いでつくった企画が晴れて文科省の委託を受けることになりました。

矢祭の「子ども司書」

制度としてスタートしてこの五年間に、58人の「子ども司書」が生まれました。現在は第五期生として、11人の子どもたちが研修に励んでいます。

小学四年生から六年生を対象で、六か月間に12の講座を受講します。「本の分

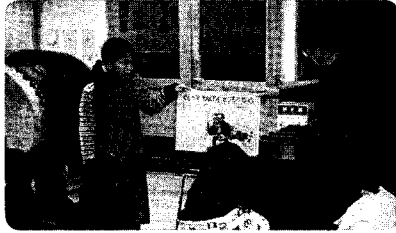


パソコン講座を受講する「子ども司書」の研修生たち

「子ども司書制度」の挑戦



高齢者施設で読み聞かせをする「子ども司書」



図書館での「お話し会」でも毎月活躍

類」「貸し出しと返却」「本のカバーかけ」「本の紹介カードづくり」といった素養のほか、「お話し会の本の選び方」や「読み語り」「パソコン講座」などを学びます。最後に図書館での実習を経て、「子ども司書」に認定されます。

「子ども司書」たちの活躍

「子ども司書」の認定を受けたら、友達や家族に読書のすばらしさを伝えたり、高齢者施設や保育園などに行つて「読み聞かせ」をしたり、「矢祭もつたない図書館」の手伝いをしたりと、地域の「読書推進リーダー」として活動します。友達に誘われて参加したという子どももいますが、もともと本好きな子どもが多く、それだけに説得力のある動きをしてきています。

「お年寄りに喜んでもらえるには、どんな本を選べばいいんだろう」「保育園児には、どんなスピードで読んであげればいいんだろう」などと真剣に悩むのも、だからこそです。

埼玉県の三郷市も「子ども司書制度」を推進しています。ここには、東日本大震災で罹災した福島県広野町の方たちが多く移住しています。この方たちを励まそうという声が、「矢祭子ども司書会議」で出されたことがあります。広野町出身の子どもたちの前で、読み聞かせを披露したのですが、予想以上に感謝されて、自分たちの有用感に気がついたようです。

「交流会では大きな声で読めなかったけど、感謝されて嬉しかったです」。うそ偽りのない、謙虚な、子どもらしい感想でしょう。ちょっとした誠意が相手に認められる。この瞬間を味わうことができたからこそその言葉だと思えます。

「矢祭もつたない図書館」では、設立準備の頃から、たくさんボランティアの方が働いてくれています。汗まみれ、埃まみれになりながらも、「将来を担う矢祭の子どもたちのために」とお手伝いしてくださっています。

そんな気高くも、思いやりのある志をもった大人たちと活動をとにもするだけでも、子どもたちの心に栄養が注ぎ込まれるのではないで

しょうか。「子ども司書」を通して、心の教育ができれば、こんな嬉しいことはありません。

小学校の先生方へお願い

学級文庫であれ、図書室であれ、すべての本が棚に収まっているのではないでしょう。ところが書店ではとくに売れる本の表紙

を見せたり手前の台に置いたり工夫しています。その方がお客さんの目に留まりやすいからです。本屋さんのマネをしてほしいな、と私はいつも思っています。

子どもたちにぜひ読んでもらいたい本があったら、その本だけ、目立つように並べていただけませんか。自然科学に係る本であれば、理科室の前に展示するのもいいですね。それだけで子どもたちの好奇心をくすぐることになると思えます。

図書委員の子どもたちから、陳列のアイデアを募集すれば、子ども発の企画になります。取り組みにも積極性が加味されるでしょう。

さらにお願いできるなら、図書委員を「子ども司書」に改めていただきたい、とも思っています。活動がもっとアグレッシブになるのではないのでしょうか。制度的に難しい点多々あるうかと思いますが、あえて提案させていただきます。

(聞き手 編集部)